

オリンピック、ボストンから箱根駅伝へ(敬称略)

高校生や大学在学中に世界のマラソンで活躍した選手もいました。第10回ロサンゼルス五輪で、金恩培が6位入賞。田中茂樹が第55回ボストンマラソンで優勝。瀬古利彦が全盛期の1980年モスクワ五輪に出場してれば、間違いなくメダルを獲得していたでしょう。

【八島健三】小樽中学～明治大学～安田生命

1923年4回	3区1位	1:19:20新	総合4位
1924年5回	10区1位	1:18:43	総合優勝
1925年6回	5区1位	1:45:34.8新	総合優勝
1926年7回	5区1位	1:42:43.2新	総合2位
1927年8回	5区1位	1:50:38	総合3位
1928年9回	5区4位	1:43:12	総合優勝

小樽中学校(現小樽湖陵高等学校)在学中の1920年にアントワープ五輪マラソン出場、21位。翌21年に、第5回極東選手権マラソン日本代表。

箱根駅伝に6年連続出場。5年連続区間賞。3回の総合優勝に貢献しました。

【田代菊之助】人力車夫：中央大学

人力車夫として働きながら、中央大学の夜間部に在籍。1924年のパリ五輪マラソン出場、

20km付近で棄権。当初、アマチュアではないので、最終選考会の出場が不可とされたが、大会直前に出場が認められました。大日本体育協会が決定した田代の五輪派遣に、早稲田、慶応、明治の三大学が大反発。他大学も呼応し、大日本体育協会主催大会への出場を拒否。内務省主催の神宮競技大会もボイコットし。日本のスポーツ界が紛糾する大問題となりました。箱根駅伝に2回出場しました。

1927年8回	10区1位	1:17:28:8	総合2位
1928年9回	10区3位	1:20:20	総合8位

【金恩培】養正高等普通学校～早稲田大学

1934年15回	7区1位	1:11:59	総合優勝
1936年16回	7区5位	1:17:47	総合2位

養正高等普通学校(日本統治下の朝鮮)4年生の1932(昭和7)年5月、東京で開催されたオリンピック最終選考会で2位入賞。ロサン

ゼルス五輪マラソンでは、2時間27分28秒で6位入賞を果たしました。卒業後、早稲田大学に進学、箱根駅伝に2回出場しました。

1952年28回	3区5位	1:17:24	総合3位
1953年29回	5区1位	1:28:17	総合3位
1954年30回	3区3位	1:14:02	総合2位
1955年31回	5区3位	1:31:02	総合2位

【田中茂樹】広島県比婆西高校～日本大学

19歳、1951年のボストン選考会を2:28:16で優勝。日大入学前、4月の55回ボストンマラソン優勝。箱根駅伝に2回出場しました。

1977年53回	2区11位	1:16:58	総合13位
1978年54回	2区2位	1:13:54	総合6位
1979年55回	2区1位	1:12:18	総合4位
1980年56回	2区1位	1:11:37	総合3位

【瀬古利彦】早稲田大学

1978年福岡国際マラソン優勝、世界歴代10位
1979年ボストンマラソン2位、世界歴代9位
1979年福岡国際マラソン優勝、モスクワ五輪代表権獲得も、ボイコットで出場できませんでした。日本最強のマラソンランナーです。

●田代菊之助(車夫で中央大学夜間部の学生)の1924年パリ五輪出場を巡るアマチュア問題

大日本体育協会は、1923年2月に競技者参加資格を改訂しました。

「車夫を業とするものは同時に学生たると否とを問はず之を第二部に属するものとす」とあり、車夫として働いていた田代は、当初、パリ五輪最終選考会の第一部のレースに参加することは認められませんでした。ところが、大会直前に一転して出場を認めました。10000mを日本記録で優勝し、マラソンと10000mの日本代表になりました。

競技者資格を守らない大日本体育協会の決定に、早稲田、慶応、明治の三大学が大反発。協会の大改造を求める決議文を提出しました。期日までに回答がなかったので、学生たちは更に反発。大日本体育協会主催の大会には、今後一切出場しないことを通達。これに十三大学が同調しました。1924年の内務省主催の明治神宮競技大会(国民体育大会の前身)の役員編成から、学生が要求する協会の役員を排除する配慮を見せましたが、十三大学は内務省主催の競技会もボイコットしました。

●日本統治下の養正高等普通学校

峰岸昌太郎率いる養正高等普通学校が、関西中学校駅伝大会(現在の全国高等学校駅伝競走大会の前身)に初出場から三連覇を達成しました。ここから、オリンピックや箱根駅伝出場者が生まれました。

金恩培 1932年ロサンゼルス五輪マラソン6位、箱根駅伝(早稲田大学)2回出場

南昇竜 1936年ベルリン五輪3位(銅メダル)、箱根駅伝(明治大学)3回出場

孫規禎 1936年ベルリン五輪優勝(金メダル)、明治大学(日本でのレースは許可されませんでした)

※日本統治下の朝鮮(日韓併合1910年8月29日～対連合降伏1945年9月2日)

現在の大韓民国(韓国)と朝鮮民主主義共和国(北朝鮮)

●岡部平太、金栗四三と「オリンピックマラソンに優勝する会(1950年)」

戦後、日本が世界に勝てるのはマラソンしかないと考えていた岡部平太は金栗四三に相談。「オリンピックマラソンに優勝する会」を創設。福岡を中心に合宿を重ね、田中茂樹、西田勝雄、広島庫夫、山田敬蔵、濱村秀雄、貞永信義、重松森雄等、日本のトップ選手を育成、日本マラソンの黄金期を築きました。西田は、ボストンで2回入賞。ヘルシンキ五輪代表、箱根駅伝でも活躍しました。ボストンマラソン優勝：田中、山田、濱村、重松



写真：中央がっちりしたのが岡部

右端立っているのが金栗四三

一列目右端が田中茂樹

二列目左から二人目が山田敬蔵 (number.bunshun.jp より)

参考文献 ① 箱根駅伝公式サイト ② 西日本新聞『平和台を作った男』2019年1月8日

③ 根本想『日本におけるアマチュアリズムの形成』早稲田大学学位論文2017年